

『魔法少女まどか☆マギカ』論 希望と絶望、二つの共感のすれ違い

荻野将太

〈目次〉

第1章	はじめに.....	1
1.1	研究概要.....	1
1.2	研究の動機.....	2
第2章	『まどマギ』の紹介.....	2
2.1	『まどマギ』の概要..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
2.2	『まどマギ』のあらすじ.....	2
第3章	「セカイ系」と『まどマギ』.....	3
3.1	『まどマギ』の先行研究..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
3.2	「セカイ系」とは何か..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
3.3	『まどマギ』はセカイ系か..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
第4章	斎藤環による『まどマギ』評.....	4
第5章	『まどマギ』が描いたもの..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
5.1	三界理論の導入..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
5.2	『TV版』で起こったこと、『叛逆の物語』で起こったこと..... エラー! ブックマークが定義されていま	
5.3	ほむらの「愛」.....	5
5.4	出会いからまどかによる宇宙改変まで：まどかの現実界的存在に対する共感..... エラー! ブックマーク	
5.5	まどかによる宇宙改変から『叛逆の物語』中盤まで：まどかの象徴界的理想に対 する共感..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
5.6	『叛逆の物語』中盤以降：まどかの現実界的存在に対する共感と象徴界的理想に 対する共感..... エラー! ブックマークが定義されていません。	
5.7	まどかとほむらの自己愛の獲得経緯に見る物語の背景.....	6
5.8	まとめ：結論と今後の展望.....	6
参考文献	6

第1章 はじめに

1.1 研究概要

本研究は、アニメシリーズ『魔法少女まどか☆マギカ』（新房 2011）（以下：『まどマギ』）が、人間の持つ「共感」作用を二種類に分類し、そのすれ違いを描いた作品であったという

ことを明らかにすることを目的としている。またその過程において、従来『まどマギ』が論じられる際によく参照されてきた「セカイ系」という作品類型と本作を改めて比較する。

1.2 研究の動機

『まどマギ』を初めて視聴したとき、私は衝撃を受けた。TV アニメ全 12 話と劇場版 1 作のみとは思えないほど充実した内容に、一切無駄のない展開、次々に予想を裏切る形で明かされる物語の真相など、何もかもが感激するほど面白いと感じた。あまりの面白さから本作について調べ始めた私は、『まどマギ』が多くの人から非常に高く評価されていることを知り、これだけの評価を受ける作品には何か普遍的な魅力があるに違いないと考えた。本研究の主な動機は、この普遍的な魅力の正体を突き止めたいと強く感じたことである。また、詳細は後述するが、本作について調査している中で『まどマギ』はセカイ系をはじめとしたゼロ年代に見られる作品の要素を総まとめにした作品であると評する見解が見られた。しかし、私にはその評価が本作の魅力完璧に表現できているようには思えず、「『まどマギ』にはその面白さを裏付けるオリジナルの“何か”が絶対にある。」と確信を抱いていた。この確信を論理的に説明することが本研究にとって非常に重要なポイントとなると感じ、これが本研究の方針を固める主な動機となった。

第2章 『まどマギ』の紹介

2.1 『まどマギ』の概要

『まどマギ』は、アニメ制作会社シャフトによって制作され 2011 年に放送された TV アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』（以下：『TV 版』）全 12 話に始まるシリーズ作品である。本作はタイトルに「魔法少女」という言葉を冠しているが、その実態はシリアスな展開が続くダークファンタジーであり、従来の「魔法少女もの（セーラーMoonシリーズやプリキュアシリーズなど）」の“お約束”を次々に裏切る形で物語を進め、当時の視聴者に大きなインパクトを与えた¹。2年後の 2013 年には『TV 版』の続編である映画『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編] 叛逆の物語』（新房 2013）（以下：『叛逆の物語』）が公開され、深夜アニメ発の劇場作品としては当時初めて興行収入 20 億円を記録した。

2.2 『まどマギ』のあらすじ

以下に、本論の内容把握補助のため『TV 版』と『叛逆の物語』それぞれの大まかなあらすじを紹介する。

① 『TV 版』あらすじ

女子中学生の鹿目まどかは、ある日、願い事を一つだけ叶える代わりに「魔法少女」になってほしいと言う謎の生き物キュゥベえと出会う。キュゥベえによると、世の中には、人々に不安や憎しみを振りまいて絶望に陥れる「魔女」という怪物のような存在がおり、魔法少女とは、その魔女と戦い世界に希望をもたらす使命を帯びた少女のことであるという。まどかは先輩魔法少女の巴マミに対する憧れや、人のためになることがしたいという思いから何度か魔法少女になる契約を結ぼうとするが、その契約はつい先日転校してきた魔法少女であ

る暁美ほむらによってことごとく阻止されてしまう。

その後様々な事件を経て、魔女は極限まで絶望した魔法少女が変異した姿であるということ、キュゥベえはその際に発生する莫大な感情をエネルギーとして回収するため地球に来訪しているという真相が明かされる。また、ほむらは、その事実を知らないまどかが魔法少女にならないようにするため別の時間軸（世界線）からやってきたということが判明する。ほむらはまどかを救うことだけを目的に何度も同じ時間をループしたため、複数の時間軸の「因果」が全てまどかに収束していた。その結果、まどかに秘められた魔法少女としての潜在力は強大なものになっていた。最終的にまどかはその潜在力を活かし「全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい。」という願いを叶えて魔法少女になり、宇宙の法則を書き換え、「円環の理」という概念的な存在となる。「円環の理」として魔法少女を魔女化する寸前に救済するという役目を背負ったまどかは、世界から人間としての自分の存在を消すこととなる。まどかによって改変された世界の中で、唯一人間としてのまどかのことを鮮明に記憶しているほむらは、「円環の理」による救済（＝まどかとの再会）の時まで戦い続ける。

②『叛逆の物語』あらすじ

ある朝、暁美ほむらは（初対面のような演出で）転校生として鹿目まどかと出会う。二人は他の魔法少女らと共に「ナイトメア」と呼ばれる敵を討伐する生活を続けるが、しばらくしてほむらはその日常や世界に疑念を抱くようになる。

まどかは過去（TV版終了時点）に「円環の理」となったはずであり、まどかが人間の形で存在しているこの世界は本来あり得ない。このことに気づいたほむらは、今過ごしている偽物の世界を作り出せる人物を追及し元の世界を取り戻そうとする。ところがその過程で、そもそもまどかが存在する現在の世界を作り出すことができるのは、まどかによる宇宙改変後にまどかのことを知っている人物、すなわちほむら自身のみであることに気づく。この偽物の世界はほむら自身が作り出したものであると判明し、またそれと同時に、ほむらは自分が既に魔女になりつつあることを認識することとなった。

その後、偽物の世界は破壊され、「円環の理」としてのまどかがほむらを迎え救済しようとした瞬間、ほむらが逆に「円環の理」から人間としてのまどかの部分を引き剥がしてしまう。途端に宇宙の法則は再度ほむらによって書き換えられていき、まどかが「円環の理」としてではなく人間として生活することができる世界が生み出された。この行動に至ったほむらは自らを「神（円環の理）」に叛逆した「悪魔」と称する。その原動力となった感情は、魔法少女としての希望でも魔女としての絶望でもなく、まどかのためだけの「愛」だった。

第3章 「セカイ系」と『まどマギ』

『まどマギ』は、ゼロ年代とテン年代の狭間にあたる時期に放送され大ヒットを収めたことから、ゼロ年代に流行した「セカイ系」というジャンルと比較して論じられることが多かった。セカイ系とは、2000年代（ゼロ年代）に流行した日本のサブカルチャー作品ジャンルの一つである。ところが、この言葉の定義については、流行当初から今に至るまで様々な議論がなされてきたものの、未だ決定的な結論は出ておらず、明確な定義がないままであ

った。そこで、本研究では再度『まどまぎ』とセカイ系を比較するにあたって、^{まえじまさとし}前島賢の著書『セカイ系とは何か』（2010）と、サブカルチャーのジャンルで平均的に用いられているオンライン百科事典「ニコニコ大百科」を参考にして、セカイ系の定義を次のように仮定した。セカイ系とは、「主人公とヒロインが世界の大規模な変動や危機に直接、不可避的に巻き込まれ、その中で己の無力さを嘆いた主人公の精神世界や心情描写、要するに自意識の話が重視される作品」である。

では、以上の議論を踏まえ、『まどまぎ』はセカイ系にあたる作品と言えるだろうか。たしかに作中では、主要登場人物のまどかとほむらという二人の関係が、宇宙の法則の書き換えという極めてマクロな事象の話に飛躍するため、セカイ系的な要素が示唆されているように受け止められる。しかし、実は『まどまぎ』における最大の脅威は十分に回避可能なものであり主人公のまどか自身が自らその困難に立ち向かっているということや、まどかとほむらの関係性が「きみとぼく」というシンプルな対一の関係に収まっていないということ、そして無力な少年（少女）の自意識についてはほぼ一切描かれないということなどを踏まえると、本作はセカイ系とは言い難いという結論に至る。

これにより、『まどまぎ』はゼロ年代的・セカイ系的な要素を示唆する作品ではあるが、そういった要素は本作の本質的な部分とは言えないという考えに到達する。では、『まどまぎ』が描いたものの本質とはどのようなものなのだろうか。

ここで結論を先取りすれば、『まどまぎ』は二種類の「共感」のすれ違いを描いた作品であると言える。この点を明らかにするため、以下では『まどまぎ』がどのような世界観・構造のもとで繰り広げられた作品であったかを改めて検討し明確にしていくこととする。

第4章 『まどまぎ』はどのような物語か

4.1 まどかとほむらの共感のすれ違い

斎藤環は『ユリイカ 11月臨時増刊号 第43巻第12号 総特集=魔法少女まどか☆マギカ—魔法少女に花束を』（2011）にて、『まどまぎ』評論を記している。斎藤が指摘するのは、『まどまぎ』の世界観が「感情があたかも貨幣のように取り扱われている」（斎藤2011:39）という点だ。『まどまぎ』の主軸にあるのは、「希望」と「絶望」という二種類の感情を宇宙の寿命を伸ばすためのエネルギーに変換するという「魔法少女システム」である。このシステムは、「希望」を抱く魔法少女が「絶望」を振りまく「魔女」と呼ばれる怪物のようなものと戦うことによって機能するのだが、実は「魔女」とは、戦いの中で「絶望」に陥った魔法少女の成れの果ての姿であるということ、そして魔法少女が魔女になる瞬間に膨大なエネルギーが得られるということが明かされる。上述の斎藤の説明はこの点を踏まえたものである。

ここで斎藤は本作の感情の在り方を単に「価値」としてしか説明しなかったが、ここにラカンの三界理論を応用して考えると、魔法少女システムは更に普遍的な説明を以て理解できるものであることが分かる。なお本研究では、ラカンの三界理論をまどかにおける共感とほむらにおける共感を区別するために用いる。現実界、想像界、象徴界をここでは簡略し、個人の実存の構成要素としてつぎのように位置づける。現実界は、物理的な身体そのものの

水準、想像界は他者及び自己へのイメージと共感作用の水準、そして象徴界は、人間が成長するにしたがって参入する言語秩序およびそれに基づく社会システムの水準を表す。個人はこの三界に跨った形で自我を形成しているが、それぞれの水準への傾きや親和性には個人差がある。これを踏まえ、ここでは作中の「希望」と「絶望」という二方向の感情を象徴界（システムのなもの）志向の共感作用と現実界（身体的なもの）志向の共感作用として捉える。

以上の作品構造に対する認識を踏まえると、『まどまぎ』はどのような物語だったと説明できるだろうか。これを考えるにあたって私が最も重要だと考えたのは、主要登場人物であるまどかとほむらという二人の魔法少女の関係である。

ほむらは時間遡行をする能力をもつ魔法少女で、『TV 版』では何度も時間遡行を繰り返す中で複数の時間軸のまどかと出会うのだが、その過程でほむらはまどかに対して二種類の共感を抱く。一つ目は、「まどかに一人の人間として生きていて欲しい」という、まどかの身体を前提とした現実界志向の共感である。まどかは『TV 版』の終盤に魔法少女が魔女にならない世界を作るため、宇宙の法則を書き換え、自分自身が新しい宇宙のシステムになるのだが、その代償として人間としての己の存在を世の中から完全に抹消してしまう。自分を犠牲にしてまで人の役に立とうとするまどかに、「もっと自分を大切に人間としての人生を送って欲しい」という思いをほむらは抱くのだ。そして二つ目は、「まどかの決断や意志を尊重したい」という象徴界志向の共感である。前述のまどかの犠牲を蔑ろにするわけにはいかないと考えたほむらは、彼女の意志を尊重しようと決意を新たにして、まどか不在の世界で戦い続けた。

詳細は後述するが、基本的にほむらにとっては前者の方が特に重要だったのだが、対するまどかは後者を重視する性格であったため、物語が終盤に進むにつれ二人はすれ違ってってしまう。『叛逆の物語』の最終盤にて、どちらを重んじるかという葛藤に陥ったほむらはこのジレンマを解決しようと新たに宇宙を改変し、「まどかが人間として生きていながら、まどかによって生み出されたシステムが機能している」という世界を無理やり作り出してしまう。この新しい世界は、本来成立し得ない相反する共感を無理に両立させたものであるが、そのことは作中最後のまどかとほむらの会話で二人が後に敵対する可能性が示唆されることで逆説的に示されたのであった。

以上の議論をまとめると、『まどまぎ』には共感が二種類あり、まどかとほむらの重視するものが違っていたために二人の共感はずれ違ってしまった。このすれ違いを無理やり解決しようとしたほむらは二人の敵対という新たな悲劇の可能性を生み出してしまう。その悲劇の可能性は共感のすれ違いの解決の難しさを逆説的に示している。」と説明することができるだろう。

では、そもそも何故そのようなすれ違いが起きたのだろうか。ここには、二人が共通して抱えていた「自己否定」と、それが「自己肯定（ナルシシズム、自己愛）」へと昇華されるに至る経緯の違いが強く影響していると考えられる。次節ではこの点を紹介する。

4.2 まどかとほむらの自己愛の獲得経緯に見る物語の背景

先述のように、まどかとほむらが重視する共感の方向性は異なっており、対称的なキャラクターとして描かれている。ところが、二人には共通して描かれているものがあつた。それは「自己否定」である。一方、その自己否定を克服して「自己肯定（ナルシズム、自己愛）」を獲得するためのきっかけは両者で異なっている。実はこの点がまどかとほむらという二人における最も重要な違いであり、物語の顛末を決定づけるポイントなのである。

この点を簡単に説明すると、まどかにとっての自己否定からの救済は、魔法少女システムという象徴的なものによって達成される。まどかは作中で（魔法少女システムを通じて）誰かの役に立つことが「一番の夢」とまで言い切っており、まどかの象徴界志向の共感の強さが伺える。こうしたまどかに対して、ほむらにとっての「自己否定」克服のきっかけは、まどかという一人の人間が自分の存在を理屈抜きに肯定してくれることだった。ほむらが人間としてのまどかの存在を重視するには、ほむら自身がまどかから同様の共感を受けていたという背景があつたのだ。

以上から分かることはすなわち、魔法少女システムという象徴界的なものによって自己愛を獲得し得るまどかは象徴界志向の共感を強く持つのに対し、まどかという一人の人間に自己愛獲得の契機を見出したほむらは現実界志向の共感を強く持つようになったということである。これはつまり、まどかとほむらが自己愛を獲得するきっかけが異なっていた時点で二人の共感のすれ違いは始まっていたことを意味しており、『叛逆の物語』で仄めかされた二人の衝突の可能性は物語の最初から見えていた必然的な結末であると考えられるのだ。

4.3 まとめ

本研究では、「『まどマギ』とはどのような物語で何を描いた作品だったのか」という問いについて考察してきた。ここまでの議論を踏まえるとその答えは、「『まどマギ』は、象徴界的理想に対する共感と現実界的存在に対する共感という二種類の共感のすれ違いを主題としており、その解決の難しさを、双方を両立させた結果の不安定さを描くことによって逆説的に示した作品である。」と結論づけることができる。

注

¹最も有名な例の一つとして、『TV版』の第3話終盤で主人公まどかの頼れる先輩であつた巴マミというキャラクターが、大きな怪物に首から上を丸齧りされて死ぬというグロテスクなシーンがある。このシーンが視聴者に与えた印象は強烈なもので、首から上を失って絶命する様子を「マミる」と表現するインターネットスラングの誕生にまで繋がつた程であつた。

参考文献

東浩紀、2007、『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン2』講談社。

宇野常寛、2011、『ゼロ年代の想像力』 早川書房.

宇野常寛、2011、『PLANETS SPECIAL 2011 夏休みの終わりに』 第二次惑星開発委員会.
片岡一竹、2019、『新疾風怒濤精神分析用語辞典』 戸山フロイト研究会.

斎藤環、2011、「まどか☆エチカ、あるいはキャラの倫理」 山本充『ユリイカ 2011年11月臨時増刊号 総特集=魔法少女まどか☆マギカ 魔法少女に花束を』 青土社 39-51.

志水義夫、2017、『魔法少女まどか☆マギカ講義録—メディア文藝への招待—』 新典社.

新房昭之、2011、『魔法少女まどか☆マギカ』 毎日放送.

新房昭之、2013、『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編]叛逆の物語』 ワーナー・ブラザーズ映画.

スラヴォイ・ジジェク、鈴木晶、2008、『ラカンはこう読め!』 紀伊國屋書店.

高橋しん、2000-2002、『最終兵器彼女①~⑦』 小学館.

前島賢、2010、『セカイ系とは何か ポスト・エヴァのオタク史』 ソフトバンク新書.

向井雅明、2016、『ラカン入門』 筑摩書房.

WEB サイト①、アニメ!アニメ!、2014、「『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ』 興収 20 億円超え 深夜アニメから初の大台」 (<https://animeanime.jp/article/2014/01/07/16977.html> 2022.12.7 アクセス)

WEB サイト②、アニプレックス、「劇場版 魔法少女まどか☆マギカ 〈ワルプルギスの廻天〉」 (<https://www.madoka-magica.com/> 2023.1.1 アクセス)

WEB サイト③、animate Times、2011、「『魔法少女まどか☆マギカ 1』 Blu-ray が TV アニメ作品史上最高記録の初動売上達成」 (<https://www.animatetimes.com/news/details.php?id=1304680054> 2022.11.11 アクセス)

WEB サイト④、HMV&BOOKS online、「魔法少女まどか☆マギカ Blu-ray Disc BOX 【完全生産限定版】」 (https://www.hmv.co.jp/artist_%E9%AD%94%E6%B3%95%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B%E2%98%86%E3%83%9E%E3%82%AE%E3%82%AB_00000000544228/item_%E9%AD%94%E6%B3%95%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B%E2%98%86%E3%83%9E%E3%82%AE%E3%82%AB-Blu-ray-Disc-BOX-%E3%80%90%E5%AE%8C%E5%85%A8%E7%94%9F%E7%94%A3%E9%99%90%E5%AE%9A%E7%89%88%E3%80%91_5589583 2023.1.4 アクセス)

WEB サイト⑤、アニプレックス、「魔法少女まどか☆マギカ SPECIAL 魔女図鑑 薔薇園の魔女」 (<https://www.madoka-magica.com/tv/special/dic/card2.html> 2023.1.4 アクセス)

WEB サイト⑥、ニコニコ生放送、「ニコ生 PLANETS 増刊号 徹底評論「魔法少女まどか☆マギカ」」 (<https://live.nicovideo.jp/watch/lv47398722> 2023.1.1 アクセス)

WEB サイト⑦、伊川佐保子、2011、「『まどか☆マギカ』 対『フラクタル』 ゼロ年代を経てつくられた2つのアニメ」、ニコニコニュース (ニワンゴ) (<https://news.nicovideo.jp/watch/nw59946> 2022.12.4 アクセス) [⑦は⑥の内容をまとめたもの。引用文言は⑦による。]

WEB サイト⑧、ニコニコ大百科、「セカイ系」 (<https://dic.nicovideo.jp/a/%E3%82%BB%E3%82%AB%E3%82%A4%E7%B3%BB>

2022.12.4 アクセス)